

第39回日本乾癬学会 学術大会を終えて

(2024年8月24・25日)

グランフロント大阪 ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンター

今西 久幹

大阪公立大学大学院医学研究科皮膚病態学准教授

はじめに

この度、第39回日本乾癬学会学術大会(会長:鶴田大輔)をグランフロント大阪 ナレッジキャピタル コングレコンベンションセンターで開催いたしました。今回は完全現地開催で、乾癬に情熱をもつ医師・医療関係者が一堂に会し、face-to-faceで活発な討論を交わしました(図1)。参加者数は1,004名に上り、ハイブリッド開催とも引けを取らない規模になりました。もちろんハイブリッドにはメリットがありますが、完全現地開催にすることで多数

の現地参加者をお迎えすることができ、直接言葉を交わせるよさを実感できた大会になったと感じています。

テーマ

今回の学術大会は、「乾癬夫婦善哉」を大会キャッチコピーとして開催しました。これは乾癬が、現状では一度罹患すると一生にわたり、夫婦のようにお付き合いする疾患であることを表現しています。また、この疾患は患者だけでなく、その家族に



図1 会長招宴会での集合写真



図2 大会用イラストとロゴマーク

も悲喜こもごもの影響を及ぼすことを表しています。もちろん、当教室が開催させていただくこともあり、大阪にちなんでいるということも意識しました。

大会ロゴマークとイラスト

本大会のロゴマークとポスター・看板等に使用したイラストは、医局員の井上美琴先生が作成しました(図2)。これまでも他の当教室主催学会や医局のシンボルマークをデザインしています。単なる見た目のよさのみではなく、女性の着物に描かれた乾癬の皮膚病理組織像、男性の膝にある乾癬の皮疹、抗体製剤をイメージさせる着物の模様など、皮膚科医の視点を加えることで示唆に富んだものになりました。

プログラム

国内外から多様な分野のエキスパートをお招きすることができました。

海外からは、乾癬における分子生物学的研究で

ご高名なUniversity of Cologne(ドイツ)のManolis Pasparakis先生をお招きし、招待講演でご登壇いただきました。University of British Columbia(カナダ)のDavid Granville先生には乾癬を含む皮膚科疾患でのプロテアーゼの役割について、特別講演2でご講演いただきました。また、教育講演3としてMayo Clinic(USA)のAfsaneh Alavi先生に、生物学的製剤の治療薬物モニタリングなどについてご講演いただきました。

国内からは、教育講演1では当大学膠原病内科の橋本 求先生に膠原病内科医からみた乾癬・乾癬性関節炎について、教育講演2では名古屋市立大学の森田明理先生に光線療法のポジショニングと将来への展望についてご講演いただきました。特別講演1では豊水総合メディカルクリニックの飯塚 一先生にdisease module hypothesisに基づく乾癬の病態理解についてお話いただきました。当大学文学部の菅原真弓先生には浮世絵に関する文化講演も賜りました。日本脊椎関節炎学会との合同シンポジウムでは、両分野の専門家が知識を交換し合い、相互理解を深めることができました。そのほか、シンポジウム、多数の一般演題、乾癬患者友の会、掌蹠膿疱症患者会の学習会も行いました。

おわりに

乾癬学会学術大会を当教室が主催させていただくと初めて聞いたとき、大規模な学会であるため、正直なところ不安もありました。しかし、日本乾癬学会の役員の先生方、日本皮膚科学会の大会運営チームの皆様(とくに山田紀子様)、座長・演者をお引き受けいただいた先生方、医局員を含め、サポートしていただいた皆様のおかげで無事に終えることができました。心より御礼申し上げます。